和の住まいのすすめ

識者が語る日本の文化と家

和の住まい推進関係省庁連絡会議

和の住まいを見直し、こころ豊かな暮らしを

都市化が進み、日本人の生活習慣が変化したことで、伝統的な和風住宅に暮らす人の数は以前にくらべて少なくなりました。しかし、現代の暮らしの中にもう一度和の住まいの要素を取り込むことで、私たち日本人が育んできた豊かな精神性と生活文化を再発見することができるのではないでしょうか。

国土が南北に長い日本は亜熱帯に属する沖縄から、亜寒帯に属する北海道まで気候もさまざまで、植生も多様です。それを反映して、地方ごとに独自の文化を育み、伝統的な家屋のつくり方も地域ごとの特色を持っています。

しかし、日本の家屋に一貫しているのは、木や紙や土などの自然素材をうまく利用し、自然に寄り添い、人にやさしい住まいであることです。例えば、土の壁や畳は空気中の水分を吸収・放出して部屋の中の湿度を一定に保つ働きがあります。

伝統的な日本家屋は日本の文化を育んできた器でもあります。日本人は季節の移ろいを敏感に感じ取って心を寄せ、和歌や絵画、工芸などに表現し、茶道や華道などの美しい所作に昇華してきました。自然に向かって開かれた日本家屋のつくりが日本人の精神性に大きな影響を与えてきたことは間違いありません。

この小冊子が和の住まいを見直していただくきっかけとなれば幸いです。

和の住まいのすすめ

発　行　和の住まい推進関係省庁連絡会議
平成25年10月
印　刷　加藤文明社

「識者が語る日本の文化と家」編
編　集　日経BP社
ライター　介川亜紀、中川寛子、村島正彦
写　真　daj/amanaimages、岩舟雄一、浦川祐史、太田実来子、桑田和志、城山勇治、studio track、寺尾豊、林 安直、宮田昌彦、諸石 信、
撮影協力　三渓園

和の住まい推進関係省庁連絡会議は、日本の住まいや住文化の普及に取り組むことを目的として設立されました。

文化庁　農林水産省　林野庁
経済産業省　国土交通省　観光庁

目 次

【和を楽しむ】

2 古くなって味わいを増す 僕たちも、そんな家具づくりをしたい
本山 広真さん　本山 瑞沙さん

5 海外で気づいた 日本のよさを伝えようと 築70年の古民家で和を発信
奥谷 舞子さん　池田 めぐみさん

【和を再発見する】

8 100年後に「和の暮らし」を伝えたい
セーラ・マリ・カミングスさん

16 埋もれている、各地域の「和」が面白い
星野 佳路さん

22 和の住まいは、「暮らしの文化」の継承
梶浦 秀樹さん

【和の知恵を生かす】

10 畳の文化、和の文化を子どもたちに伝えてほしい
増田 勇さん

11 肌に直接触れるものだから 安心できるい草を
加耒 誠一さん

11 畳には、色、香り、感触の三つのリラックス効果が
森田 洋さん

12 襖、障子が育む日本人の意識、生活
池田 修治さん

13 障子一つで、和の演出と室内環境の改善を実現
太田 明さん

14 瓦が生み出す日本の美しい風景
野口 安廣さん

15 古代から日本人の暮らしには竹があった
渡邊 政俊さん

【和の文化を伝える】

18 住まいに手を入れながら 暮らす喜びを取り戻す
斎藤 英俊さん

19 素を大事にする文化が 世界の「ジャパン＝漆」を生んだ
丸山 高志さん

20 時間をかけてつくり上げる日本の家
西澤 政男さん

【和の心を育む】

24 廊下の片隅にスツールを置き 床の間代わりに花を飾る
池坊 由紀さん

25 子供の記憶に一生残る着物姿を
堀井 みち子さん

26 伝統的な日本の家は 高い精神性を備えている
重川 隆廣さん

28 仏壇を前に三世代一座、家族がつながる
小堀 賢一さん

29 時を刻む住まい 和を大切にする住まい
安藤 直人さん

佐賀県江北町上小田地区に、本山夫妻の住まいでギャラリーショップのbookMt.はある。家具の製作工房は、広真さんの実家、かつて農業用の小屋を改修して使っている

古くなって味わいを増す 僕たちも、そんな家具づくりをしたい

本山 広真さん
本山 瑞沙さん

「日本の家は、畳や土壁や木だったり自然素材でつくられていますよね。古くなって、味わいが増します。僕たちは、この家のように、大切に長く使われるような本物の家具をつくることが理想なんです」

この古家を買ってリノベーションして暮らす本山広真さん（36歳）と瑞沙さん（37歳）は、ともに家具デザイナー。夫の広真さんは、家具の製作も手掛け、bookMt.（ブックマウンテン）という二人だけのギャラリーショップを構えている。この家は、二人の住まいであるとともに、週末を中心に彼らのつくった家具のギャラリーショップとして利用しているという。

二人は、このbookMt.のある佐賀県江北町の隣町、白石町の出身で高校の同級生という間柄だ。大学卒業後に、時期の違いはあるものの、長野県にある県立の職業訓練校で家具づくりについて学んだ。

その後、それぞれ家具会社など社会に出て経験を積んだ。そして、郷里に戻って、二人でアトリエを構えることを決意したのだと言う。

築74年の古家を自ら改修

「結婚することになって、家探しを始めたんです。古くてもよくて、自分たちで手を入れてよいところ。安く借りられる、という条件で探していたんです。最初は買うことは考えていませんでした」と瑞沙さん。そして、たまたま見つけたのがこの家だった。

玄関を入ると洋間が設けられている。かつて江北町は、炭鉱町として栄えていた。その時代には、若い医者がこの部屋を間借りして、診療所として利用したこともあった。改修前は、元の家主の寝室として使われていたが、合板の壁に白いペンキを塗ったことで明るくモダンな部屋に生まれ変わった

太平洋戦争の開戦前、横浜からわざわざ職人を連れてきてつくった家。土壁で設えられた玄関周りの装飾や、廊下の丸窓の指物などに都会的センスがうかがえる

屋根瓦の補修やシロアリに喰われた床下など、どうしてもプロの手を借りなければならない箇所以外は、プロの助言や指導を得ながら自分たちの手で改修した。改修にかけた費用はトータルで100万円に満たない

本山夫妻がつくる無垢の木をつかった家具が、和室とどう調和するか見て、感じてもらえることも、このギャラリーショップの重要な役割だ

玄関脇の窓も建てられた時代を感じさせる。一輪の花が来客をもてなす

1939年（昭和14年）に建てられた築74年の平屋だ。横浜で鉄の貿易で財をなした地元出身者が、横浜から職人を連れてきて両親のためにつくったのが、この家なのだという。玄関を入ると、すぐに洋間があって、その奥に和風の空間が控えている。玄関や洋間まわりのしつらえが、昭和初期のモダンな空気を今に伝える。

4〜5年は空き家になっており、この地を離れた家主の子息が売りに出していた。「取り壊して更地にするにもお金がかかる。思い出深いこの家を使ってくれるのなら」と、破格の値段で譲り受けたのが2010年の夏。それから、地元の大工・左官職人・空き家再生を行うNPOなどの協力を得ながら、約10カ月かけて自分たちの手で改修した。

地域の人々にも愛されながら

二人が結婚して、bookMt.をオープンしたのは2011年7月だ。この家に移り住んで2年ほどが経っていた。

「夏は暑くて冬は寒いですよ。でも、それ以上に四季を感じられるこの暮らしが楽しい」と広真さん。「先日地域のお祭りがあって、以前の家主の親戚たちが見に来て懐かしんでくださった。そんなこともささやかな喜びです」と瑞沙さん。

若い感性で甦ったこの住宅は、ここに暮らす本山さんたちにはもちろん、訪れる人たちに愛されながら、さらに時を刻んでいくのだろう。

蕾の家には広いウッドデッキや庭もあり、木の下にはハンモックがゆらゆら。奥谷さんの夫、智さん、長女の凛々子ちゃんもこの場所がお気に入り

海外で気づいた日本のよさを伝えようと築70年の古民家で和を発信

奥谷 舞子さん
池田 めぐみさん

神奈川県鎌倉市で築70年の古民家「蕾の家」を舞台に、日本のよさを発信する各種教室、イベントなどを主宰する奥谷舞子さん（28歳）。日本に目を向けるようになったきっかけは、大学の卒業旅行だった。

「スペイン・バルセロナで、その地域ならではの生活を経験したのですが、その時、自分の日常を振り返り『私は自分の国の暮らし、文化をちゃんと知っているだろうか』と思ったのです。都心でマンションに暮らし、日本らしいものを感じることのない毎日。日本人としてそれでいいのか、と」

その時、一緒に旅行していたのが、現在「蕾の家」をともに経営している池田めぐみさん（28歳）と池田さんの妹。3人は旅行の間中、帰国後は日本のよいものを取り入れた暮らしを海外も含め、多くの人たちに伝えるような事業をしたいねと話し合っていたと言う。

帰国後、大学院に進んだ奥谷さんは環境工学を学ぶ中で、古民家がいかに自然を上手に無駄なく利用しているかを知った。

「池田さんの出身が鎌倉で、年々古い家が減っていくのをもったいなく思っていましたし、始めるなら古民家だと。鎌倉に場所を絞って賃貸物件を探す中で出会ったのが、この

壁に珪藻土を塗る作業は自分たちで行った。サッシを黒く塗るなど、自分たちでできる作業は自分たちの手で、がモットー

自然素材が面白いのは、
見ていて質感を感じるということ。
優しさ、強さ、温かさ……。
それが工業製品にない魅力だろうと思います。

1 広い庭だけに草刈りは大家さんの手を借りても一仕事。「サウナに行かなくても汗がかけます」と池田さん。2 古い梁の上にはカードを飾るなど、いかにも和風というスタイルではないのに、和を感じる不思議な場所。3 大学の同級生という奥谷さん（右）と池田さん（左）。4 広いウッドデッキ、庭で伸び伸び育つ凛々子ちゃん。奥谷さんと一緒に毎日ここに通う

建物でした」

当時は前居住者によってごく普通の内装が施されていたそうだが、たまたま知り合った古民家再生協会の仲介で解体される築100年の古民家から建具類を譲り受け、入れ替えた。建具類の交換に加え、土壁には珪藻土を塗り重ねるなどのリフォームを行い、現在の姿に。卒業旅行から4年目のことである。

五感が磨かれる古民家暮らし

現在、蕾の家は昼間、各種教室、国際交流その他のイベントに利用されており、子どもから高齢者まで幅広い年代が集まる。

「不思議なのはどの年代、国籍の人にもこの家はなんだか、温かい、ほっとすると言われること。70年というこの家の歴史を考えると人間の年の差なんて、たいしたことないということなんでしょうね」

夜は池田さん姉妹が居住。古民家暮らしのよさと大変さを実感している。「冬はとても寒くて辛いし、トタン屋根を打つ雨の音はすさまじくて、このまま家が流れてしまうんじゃないかと思うほど。でも、だから、逆に日差しが一日一日暖かくなっていくのがうれしくてたまらないし、雨に濡れた木々の輝きがなんとも言えず、美しく感じるのです」と池田さん。

現代の世の中は何事も効率が優先される。その観点からすると古民家は非効率的で無駄が多い。しかし、それに真剣に立ち向かうと、五感が研ぎ澄まされ、全身で自然を感じるようになる。

池田さんは「古民家に住んでみて分かったのですが、人間は便利過ぎると退化してしまう。ここに住むと手間がかかるから、体を動かす。汗をかく。おかげで引っ越してきてからは体調もよく、風邪もひかなくなりました」と言う。

蕾の家に通ってくる人たちの中には古民家のよさに触れ、自らも古民家に住もうと家探しを始めた人たちもいる。

「住めば住むほど愛着が湧き、よくなってくる。それが古民家の魅力。どうせ暮らすならそんな家のほうがいいですよね」と二人は声を揃える。

100年後に「和の暮らし」を伝えたい

セーラ・マリ・カミングスさん

日本は、極端から極端に走りすぎているのかもしれない。
古くから続く日本の文化も大切にしながら、
新しい技術と溶け合わせることが大切では。

「地に足の着いた生活」は、アスファルトではなく土と触れることから

profile

セーラ・マリ・カミングス

1968年、アメリカ・ペンシルベニア州生まれ。1994年、小布施堂に入社。欧米人で初の利酒師に認定される。ウーマン・オブ・ザ・イヤー2002大賞受賞（「日経ウーマン」日経BP）。長野県小布施町の町おこしの立役者として知られる。現在、文化事業部代表取締役。

今の日本人は、古くから受け継がれてきた日本の家は寒いし不便だと見捨てて、新しい住宅やマンションを好みます。本当にそれでよいのでしょうか？ 時代に合わせて変化することは必要だけれど、何が本当に大事なのかを見極めなければ。

日本の家の一番よいところは、襖を開けたり閉めたりすることで部屋が広くなったり、狭くなったり、フレキシブルな使い方ができることだと思います。個人的には家の外と内をつなぐ縁側が大好きです。

風景のことを考えても、今の日本のあり方はどうなのかな。個人の家についても〝外側はみんなのモノ、内側は個人のモノ〟という考えが本来日本にはあったはずです。家は、みんなが共有する風景の一部でもあるからです。

ところが、日本では、いま日々新しい家や建物が建てられ風景が変わっていきます。それが残念でなりません。発展することも大切ですが、古いものも残しつつ、どうやって新しいテクノロジーと組み合わせることができるのか考える時期でしょう。

みんなの「かの山」をめざして

長く暮らした小布施を出ることになり、つぎの生活の場として見つけたのが、私が「かの山」と名付けたこの集落です。唱歌「故郷（ふるさと）」の歌詞にある〝うさぎ追いしかの山〟にある「かの山」です。

ここには昔ながらの懐かしい雰囲気を残したい。そうすることでみんながいちばん帰りたい「かの山」になるんじゃないかな。この家は間もなく100年を迎えます。さらに100年使える家にしたい。自分がいちばん素敵だと思うものを100年先の将来に届けてあげられるからです。

造園学者の進士五十八さんに日本語の「家庭」というのは「家」と「庭」と書くと聞きました。庭のない家は家庭じゃないんですって。コンクリートやアスファルトに囲まれた生活は便利かもしれないけれど、本当の生活じゃない気がします。「地に足が着いた」と言うときの地は、アスファルトではなく土のことでしょう。今、4歳になる子どもは庭の小池での泥んこ遊びが大好きです。おたまじゃくしもたくさんいるんですよ。着替えは10枚あっても足りません。

夏の終わりの季節に縁側を開けていると、トンボが飛んで入ってきて部屋のなかを巡って、また出て行きます。ここでは本当に自然を感じられて幸せです。

いぐさ・畳

畳のクッション性は、足の裏に適度な刺激があってよいと言われている。また良質ない草で織られた畳表は、３～４年経ったときに「琥珀色」に変わってくる。質の悪いものは、黒ずんだりムラが出てきたりする

畳

畳の文化、和の文化を子どもたちに伝えてほしい

増田 勇さん

ますだ・いさむ

1943年、鹿児島県生まれ。全日本畳事業協同組合理事長。畳店で修行を積み1967年独立。鹿児島県畳工業組合理事長など歴任。鹿児島市職業訓練協会理事。有限会社増田畳店代表取締役。

現在では、和室のない家がつくられるようになりました。たとえば一棟20戸、30戸のマンションで和室が一つもつくられない、なんていうことはザラです。急速に畳や、和の住まいの文化がなおざりにされていくのは残念でなりません。

私は、和の住まいのよさは〝気取らない住まい〟ということだと思います。家というのは、くつろいで家族が団らんするところです。

小さな子ども育てるうえで、畳の生活はよいものです。そのまま寝かせられますし、子どもに食事を食べさせていてご飯粒を落としても、畳の上だったらお母さんは拾って食べますよね。清潔だからです。大人も気軽に寝転がることができます。フローリングの床だとそうはいきません。これは、誰が教えたわけではありません。日本人のDNAの中に流れている基本的なことです。

畳に座るということは、目線の高さが椅子に座るより約40㎝低いんです。床の間のしつらえにしても、庭にしても、畳に正座やあぐらで座ったときがいちばん美しく見えるのです。

昨今でも、広さの感覚については畳が基準です。たとえば「８畳のダイニング」などという言い方をしますよね。それほど、畳は日本人の身体感覚に馴染んだものなのです。洋室に置き畳でもいい。子どもたちに畳の文化、和の文化を伝えていってほしいと切に願います。

いぐさ

肌に直接触れるものだから安心できるい草を

加来 誠一さん

かく・せいいち

1947年、熊本県生まれ。八代地域農業協同組合代表理事組合長。農業高校卒業後、い草と米を中心とした農業経営者として活躍。1995年、八代地域農業協同組合理事・副組合長を経て、2005年より現職。

畳表（たたみおもて）の原料は、い草です。国内では、熊本県八代市でその生産の約9割を担っています。

八代市におけるい草の歴史は古く、約500年前に岩崎主馬守忠久公が、い草を植えさせたのが始まりと言われています。い草の生育に向いている湿地で、塩分の多い干拓地が選ばれました。稲が凶作で飢饉になった年にも、い草農家は暮らしに困らなかったということもあり、その後この地で生産が活発になったそうです。忠久公を祭った岩崎神社では、今でも毎年、春と秋にお祭りが奉納されています。

残念なことに、近年は、中国産のい草が出回っていて、国産のシェアは3割程度に過ぎません。

国産のよさは、つくられる過程がはっきりしていることです。使う農薬も登録された安全基準をクリアした農薬を使っています。それから、生産、刈り取りから泥染め、乾燥、織りまでを一貫して同じ農家が行います。

ですから、農家が責任を持ってい草の栽培から畳表の織りまできちんと管理してつくっており、品質には自信を持っています。最近では、製品にQRコードを付けて生産者が分かるようにしています。肌に直接触れるものですから、少し値は張りますが、安全、安心の面からは国産を選んで使っていただきたいですね。

いぐさ

畳には、色、香り、感触の三つのリラックス効果が

森田 洋さん

もりた・ひろし

1970年、愛知県生まれ。九州大学大学院博士課程修了。国立八代高専助手を経て北九州市立大学国際環境工学部准教授。博士（農学）。著書「イグサのすべて」新芽出版、「驚くべきイグサの機能性」文陽舎など。

住宅の材料としてい草・畳を見たとき、いちばん機能的に注目されるのは吸放湿性です。梅雨などの高湿度期は大気中の水分を吸収し、反対に冬の乾燥期には水分を放出します。日本の住宅で畳を使うのは、気候風土と密接に関係していて理にかなっています。

このほか、い草には三つのリラックス効果があると考えています。一つ目は色です。い草の黄みどり色というのは、人に安心感をもたらす色だと言われています。

二つ目は香りです。い草の香り成分には、フィトンチッドという樹木から出る物質が含まれています。森林浴でよい気持ちになるのは木々のみどり色を目にし、さらにこの香りを嗅ぐことがリラックス効果として現れるからです。つまり、畳によって室内に居ながらにして、森林浴のリラックス効果が得られるのです。

三つ目は、足もとへの心地よい触感です。日本の住生活では、室内では素足で生活します。足もとが接する畳の感触はクッション性があり適度な刺激となります。また、夏はひんやりと、冬は温かみを感じられます。

い草には抗菌作用もあり、足のニオイの原因となる微生物を抑えたり、水虫の原因の白癬菌の増殖も抑えてくれます。こうした衛生面を含めた機能に優れる畳は再度、見直してほしい建材です。

池田 修治さん

いけだ・しゅうじ

一般社団法人日本襖振興会代表理事。伝統的な襖材料の全国的な供給地である和歌山市で襖の材料を販売。同振興会では襖に関する情報やノウハウの提供などに努めている。

襖

襖、障子が育む日本人の意識、生活

襖は開け閉めすることで風、光、音、気配をコントロールできる。襖紙、引手などにこだわることもでき、インテリアとして考えても奥が深い

日本人には襖に代表される「引き戸」は当たり前の存在ですが、開け閉めすることで、広さを調節できるという機能は中国、欧米の方々には驚きなのです。

襖には広さの調節以外にもさまざまな機能があり、日本人の意識、生活に大きな影響を与えてきました。たとえば、襖はドアと違い、部屋を完全な個室にはしません。微かに隣室の家族の雰囲気が伝わるので、家族は互いに思いやりを持って暮らすようになります。

あるいは小説家、谷崎潤一郎が「陰翳礼讃」で書いたように〝日本の美は陰翳が根源にある〟という考えは、障子越しの柔らかい光が生み出したものです。また、靴を脱いで家に入る生活様式は清潔な暮らし、几帳面で礼儀正しい国民性を育んできましたし、障子、襖を張り替えて使い続ける暮らしはエコの最先端だったと言ってもよいのではないでしょうか。

その和を手軽に現代の暮らしに取り入れるなら、リビングの一角に3〜4畳ほどの和空間をつくってみてはどうでしょう。

小上がりのように少し高くして畳を敷き、襖、障子で仕切れば趣味の部屋によし、来客時には客間、寝室にも。洗濯物を畳むのに便利という声もあり、わずかなスペースでも自在に使うことができます。

太田 明さん

おおた・あきら

全国建具組合連合会副会長。
創業65年の建具会社、太明
（東京都品川区）の代表取締役。

建具

障子ひとつで、和の演出と室内環境の改善を実現

現在でも、建具職人に依頼すれば、住まい手の要望に合うデザインや機能を満たす建具をつくってもらえるという。建具に模様を組み込む組子のような高度な技法を持つ職人は、全国で2500人程度

建具とは、住宅と屋外との仕切り、部屋の仕切りなどに使われる建材を指します。戸（ドア）、窓のほか、昔ながらの和の住宅では障子、襖、欄間などが代表的ですね。こうした建具は木製建具、金属建具に二分されていますが、戦前は職人の手でつくった木製建具が主流でした。戦後になって、洋風の和室のない住宅が増えるにつれ、和室につきものの障子や襖、欄間の出番が減ってきたのでしょうね。

洋風の住宅であっても、木製建具をアクセントに使うだけで、十分、和の雰囲気を楽しめます。実は、洋風のインテリアと昔ながらの木製建具はなじみがいいんですよ。特に、和のイメージを表現しやすいのは障子です。材料は、スギやヒノキ、スプルスなど、反りが少なく、香りも楽しめる木がいいですね。

障子は、室内環境の調整にも優れる建具です。窓辺に採用した場合ですと、屋外からの光のほか、寒さ、暑さを和らげたり、開け具合によって風や眺めを得ながら外部からの視線を遮ることもできます。また、大空間の一部を障子で仕切れるようにすれば冷暖房の効率アップにつながります。

リフォームの際に障子を上手に活用すれば、わずかな変更で、室内の雰囲気をがらりと変えつつ室内環境の改善をはかれるわけです。若い世代の方々にも、ぜひ活用していただきたいですね。

野口 安廣さん

のぐち・やすひろ

全国陶器瓦工業組合連合会理事長、愛知県陶器瓦工業組合理事長。現在、日本の３大産地である愛知県の三州瓦メーカーの経営者でもある。他の2産地は石州（島根県）、淡路（兵庫県）。

瓦

瓦が生み出す日本の美しい風景

かつては日本全国に地元の土を使った瓦産業があり、地元で消費されていた。住宅も地産地消だったといえる

粘土瓦がわが国で屋根材として使用され始めたのは１４００年以上も前から。その瓦、そして壁がつくってきたのが日本の風景です。

古都と呼ばれる街や旧街道沿いの街並みなどをイメージしてみてください。墨の濃淡のように穏やかな色目の瓦、壁があり、そこに緑が加わることで、西洋にない日本の風景が生まれていることが分かります。

また、日本は四季がはっきり分かれていることから、屋根材には多くの性能が要求されます。その点で、瓦は他の屋根材に比べ、耐久性・断熱性・遮音性など多くの優れた性能を持っています。適切に施工されていれば、数十年はおろか１００年持たせることもできるほどです。

阪神淡路大震災以来、瓦は重いから地震に弱いとの誤解や風評がありますが、実際には震度７クラスの地震にも耐え、大型台風下でも、国が決めた基準風速に飛ばされない防災に強い瓦や施工方法が開発され普及しています。耐風性能、耐震性能は他の屋根材以上なのです。

住宅建設時には他の屋根材にくらべ、割高との意見がありますが、建設後、塗装の塗り替えや葺き替えなどが不要で、トータルでみれば割安です。

特に、太陽光発電装置を載せるつもりなら、長期的にメンテナンス不要の瓦屋根がおすすめ。住まい全体の風格が上がることも請け合いです。

渡邊 政俊さん

わたなべ・まさとし

全日本竹産業連合会事務局長。京都大学で長年竹の栽培を研究。海外での技術指導にも携わってきた。竹文化振興協会専門員、京都市洛西竹林公園専門員も務める。

竹

古代から日本人の暮らしには竹があった

竹垣や袖垣はまさに和の表現。日本人の心の表現だ（写真は重要文化財 京都大学清風荘。撮影は渡邊政俊氏）

日本最古の小説が竹から生まれたお姫様の物語「竹取物語」であることから分かるように、竹は古代から日本人の暮らしとともにありました。

今見られる日本最古の竹製品は縄文時代晩期の地層から発掘された籃胎漆器ですから、古代の人たちは竹をいろいろに使っていたようです。

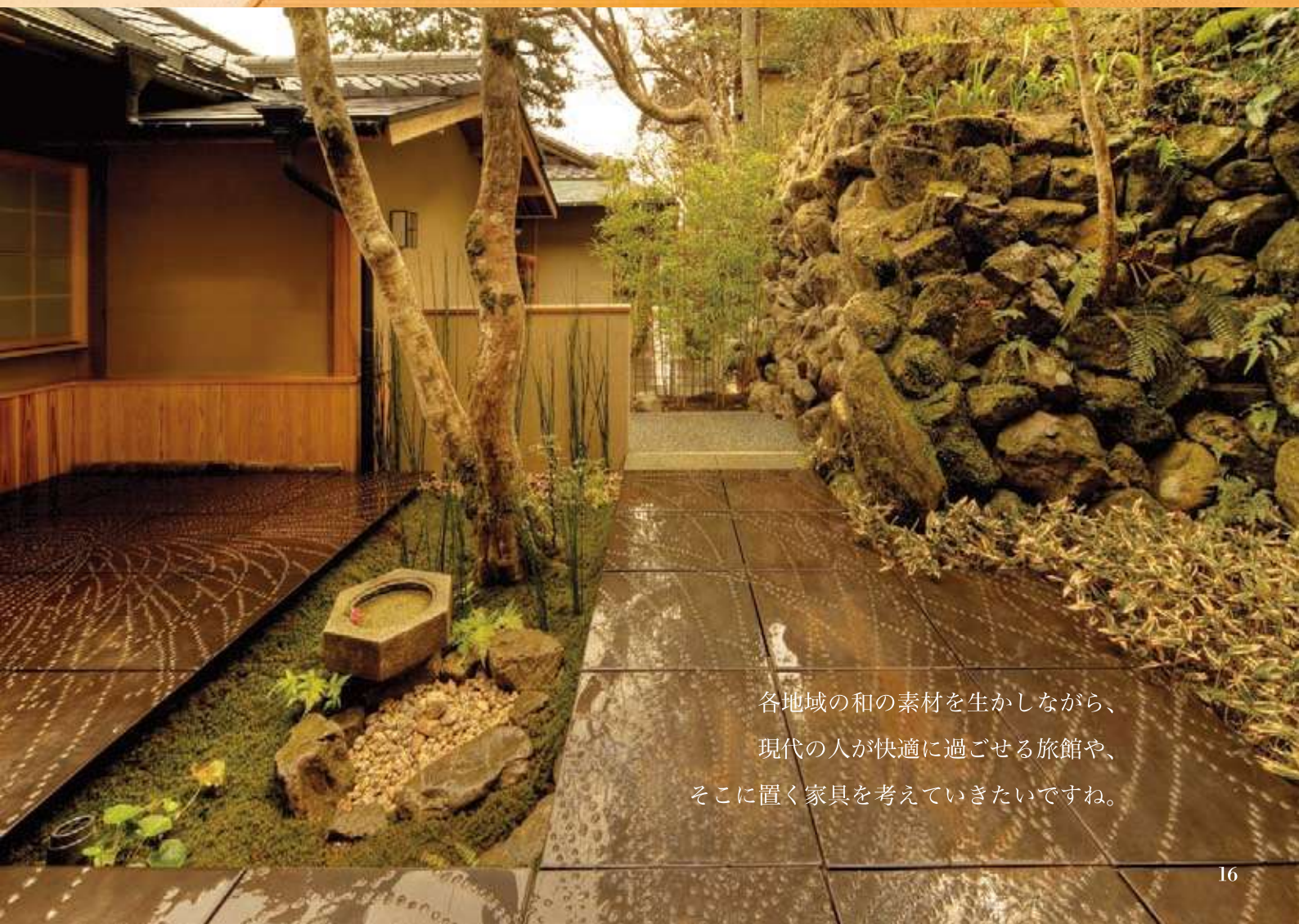
竹の空洞に霊力や呪力が宿るものと信じ、それが今日も続く、青竹を建てて工事の安全を祈る地鎮祭や、お正月のどんど焼き（左義長）、七夕など日本各地に伝わる竹を主役とした神事や祭礼につながっています。

竹の美に惹かれ、新たな文化を生み出したのが、戦国時代に登場した茶人たちでした。竹をさまざまな道具として使い、丸い竹や割った竹で天井や腰板を張ったり、各種文様にも見えるような竹垣を編むなど、この時代にはこれまでにない利用法が生まれました。お茶席に欠かせない花器にも竹が多く使われるようになりました。

このような歴史が示すように、1点の竹製品だけでも、その場を和の空間にする力があります。室内なら、おすすめは照明器具。竹を編んだペンダントライト、フロアスタンドには和モダンな商品も多く、洋室にも合います。気軽に取り入れるなら、竹の花器を使う手も。いつもとは違う、しっとりした風情が楽しめますよ。

埋もれている、各地域の和が面白い

星野 佳路さん

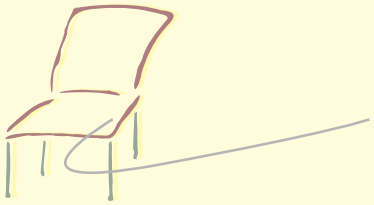


各地域の和の素材を生かしながら、
現代の人が快適に過ごせる旅館や、
そこに置く家具を考えていきたいですね。

和は画一的なものではなく、日本の各地域が独自に持っているものだと思います。私たちが日本各地に宿泊施設やリゾート施設をつくる際には、意識してその地域独特の素材を使いますが、それは和を取り入れているといえるでしょう。地元の方々は気付きにくいのですが、他の地域に住む日本人や外国人が魅力を感じる素材は、各地域で必ず見つかります。そのため、全8ブランド、約30カ所の当社の施設は、それぞれ異なる個性を持っています。

例を挙げますと、「星のや京都」には京都という場所柄を鑑み典型的な和と京文化を、沖縄の「星のや竹富島」は琉球文化を、青森の「青森屋」には津軽三味線やねぶた囃子といった現地の文化を、建物の外観や庭、室内のしつらえ、アクティビティーに反映しています。

一方、そういった文化を建物や内装に反映するのと並行して、現代に見合う機能性を取り入れ、ゲストの皆様が快適に滞在できるようにすることも重要だと思います。どこから見ても和だけど従来と比べて非常に快適、とゲストに感じていただけるような。地域によっては建物の断熱性を高めて適度な室温を保つほか、特に「寝る」「座る」「くつろぐ」場所については不便を感じないように改良を図っています。



たとえば、〝星のや京都〟で使用しているオリジナルの畳ソファ。畳の部屋に外国製のソファなどがあると違和感がありますよね。そこで、私たちとデザイナーがコラボレーションして、畳に合うソファを新たに開発したのです。和室に溶け込むように背もたれの外側には竹を使用。和室にあっても違和感がなく、なおかつ長時間座っていても快適な座面の高さや素材を追求しました。

四季のしつらえで和を表現

和の趣を持つ宿泊施設の特徴として忘れてはならないのが、〝四季〟です。西洋のホテルの場合、年間を通じて同様に客室をきれいにするという意味合いのハウスキーピングを粛々と行います。それに対し、日本で部屋を整えることは〝しつらえる〟と言う。しつらえるには、掛け軸や生け花などをはじめ、すべてに四季の魅力をいかに表現するかが大切です。日本ならではの旅館のスタッフは季節やゲストの気持ちを慮りながら、毎日違うしつらえを考え形にしていきます。こうして心づくしに整えた部屋は和の趣とともに、日本ならではの〝おもてなし〟の気持ちも伝えてくれるに違いありません。

profile

星野 佳路（ほしの よしはる）

1960年、長野県生まれ。星野リゾート代表取締役。慶應義塾大学経済学部卒業後、86年に米・コーネル大学ホテル経営大学院にて経営学修士号を取得。91年、星野リゾートの前身である星野温泉の社長に就任。「星のや」をはじめ各地のリゾート施設、温泉旅館を運営。

心を込めた客室のしつらえが和とおもてなしを表します

斎藤 英俊さん

さいとう・ひでとし

1946年鹿児島県生まれ。東京工業大学建築学科卒、同大学院博士課程修了。工学博士。一級建築士。文化庁主任文化財調査官、東京芸術大学大学院教授などを経て京都女子大学教授。建築史、文化財保存学。

伝統建築

住まいに手を入れながら暮らす喜びを取り戻す

若い人たちは「和の住まい」に関心を持ち始めている。古い街並みや、今に残る民家を安易に取り壊さずに、受け継いでいくことも大切。ちょっとした再生で住みこなしている人の体験を知ることも役立つ

現代の住宅は新築、完成したときが最もよいとされます。ツルピカの建材で建てられた住宅は、あとは劣化し価値が落ちるだけです。一方、イギリスなど欧州の国々では、古い住宅に住まい手が手を入れながら価値を高めていくのが普通なので対照的です。

元来、日本の住宅は、木材や土壁、瓦などを使ってつくられてきました。これらの自然素材は、年月を重ねるほど味わいや深みを増していくものです。たとえば、古い料亭の格子戸は、毎日磨き上げているからすり減っています。拭かないとボソボソと古び、拭いて磨いたときのすり減り方とは全然違います。毎日拭いていると木の目が硬く詰まって、結局、持ちがいいのだそうです。

現代では、住宅には手を掛けたくないという消費者の要望を汲んで、ハウスメーカーなど住宅の供給側からはどんどんメンテナンスフリーのものが提供されています。

たとえば床材、表面加工をしていない無垢の木を使ったフローリングについても、ワックスを塗れば汚れは避けられるし、さほど手はかかりません。一般的な工業製品とは、感触や質感がまったく違います。いくらか手間がかかるかもしれませんが、住まいを手入れして暮らすのは、そこから得られる自身の体験や子どもたちへの教育の面からも、見直されてよいのではないでしょうか。

丸山 高志さん

まるやま・たかし

社団法人日本漆工協会専務理事。国内のみならず、台湾で漆芸を指導した経験を持ち、海外の漆事情にも詳しい。自身も工芸作家であり、作品も多数。

漆

素を大事にする文化が世界の「ジャパン＝漆」を生んだ

古代には祭祀の用具を彩るものとして使われた漆。祈りをモチーフとした現代の作品、丸山高志さんの2002年日展出展作品「霊峰賛歌　錦秋への祈り」。絵画のように壁面を飾る大作

世界中に米を食べる民族は少なくありません。しかし、白米そのままをシンプルにいただくのは日本だけです。白いご飯が艶やかな漆器に盛られたときの美しさ、そこに日本の文化の特徴が表れています。

日本の文化は淡白を愛する素の文化。木、紙、土、藁といった自然素材を使い、しかも、そこに塗料を塗るのではなく、そのままの色合いを大事にします。

その淡白な色合いの中に、ぽっと咲くような華やぎと潤いを与えるのが漆。漆は、漆の木の樹液を使った塗り物で、素材はやはり自然のものです。しかも、東南アジア全域で産出はされるものの、質は日本産が最上。世界で「ジャパン」と呼ばれ、珍重される日本の漆製品は素材のよさが生み出したものなのです。

石器時代以降に利用されてきた漆製品が一般化したのは江戸時代になってから。食器としての利用のほか、漆の丈夫さ、高い耐水性、抗菌性などが木材などを長持ちさせるため住宅にも塗布されていました。

メンテナンスしながら、何代も使い続けられる品でもあり、〝もったいない〟が見直される今にふさわしいでしょう。そのよさを伝え、さらに新しいデザイン、用途を提案することで、漆のある日常を復活させたいと考えています。

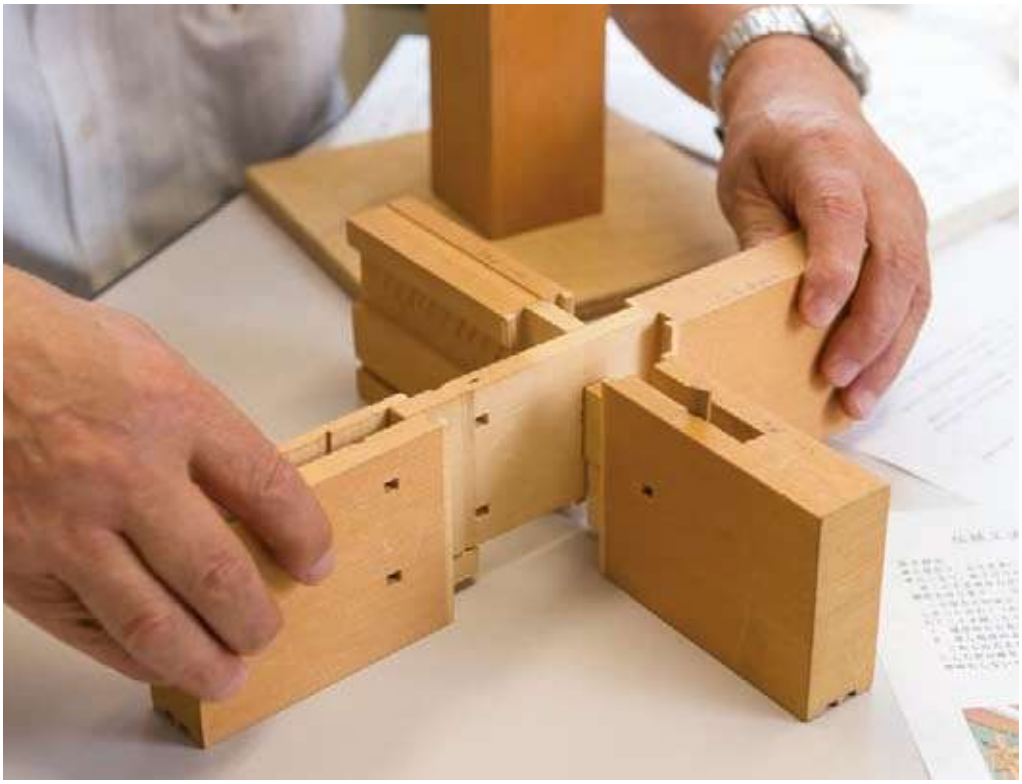
西澤 政男さん

にしざわ・まさお

選定保存技術保存団体　特定非営利活動法人日本伝統建築技術保存会会長、文化財修理技術保存連盟理事長。社寺の設計施工、国宝・重要文化財の修理工事などに長年携わってきた。

宮大工

時間をかけて つくり上げる日本の家



日本の伝統工法では複雑に木を組み合わせて柱、梁などを組み立てていく。地域によって構法には微細ながら差があるという。写真はめがねほぞの工作法

大工を始めて50年、いつも家を建てる時には「長く残るものをつくりたい」と考えます。では、長く残るものとは何か。

文化財の修復に携わる中で分かってきたのは生命力の強い建物には個性のアクがない、つまり、建てた人の主張が強くないということです。

逆に建築家の思いをそのままに表現した建物は嫌味になってしまい、世代を超えて生き続けるものにはならない。自分が、自分が、という目立つ自己主張は生き残れないのです。

現代の教育では模倣はよくない、独創に意味があると教えます。しかし、伝統は長年の間に凝縮され、不要なものを削ぎ落としてきた知恵です。まず、これに学び、その上での創造がなければ長く生きる建物は作れません。

もし、伝統的な日本家屋は高くて手が出ないと思うのなら、一度に全部つくらず、少しずつつくっていけばいいのです。平成初期までは普通にあったつくり方で、3代かけて1軒完成する例も見られました。今なら、わが子が成長し小学生になったら子ども部屋をつくるというようなやり方でしょうか。

古来から日本では、一度にすべてを完成させてしまうと〝魔が憑く〟と言って嫌ったもの。少しずつ、子孫に残せるいい家をつくると考えれば、その過程も楽しみになるはずです。

1 室内に光を取り入れ、閉そく感を和らげる襖の一部に障子をはめ込んだ中抜き襖。香道の香図がモチーフ。2 縁側を部屋の外に巡らすことで、部屋を保護し、ゆとりを生む。部屋と縁側を仕切るのは雪見障子。3 写真右手、床の間の脇にあるのは出書院窓

1 簾は窓際に吊るすことで日光を遮り、室内の涼しさを保つ仕組み。2 建替え前の家から持ってきたという「松に鷹」の絵柄の欄間。3 2年前に西澤さんが手がけたM邸。4 玄関は天井様式の中でも格が高いと言われる格天井。美しい木目を楽しめる

和の住まいは、「暮らしの文化」の継承

梶浦 秀樹さん

日本の家の美しさは、ミニマルな空間にある。
野の花を差し入れれば、季節感とともに
空間が締まり、おもてなしの表情に。

私たちは京都の古い町家を再生して、一棟貸しで滞在施設として使っていただいています。それは自分の家が京都にあるような感覚を味わっていただきたいからです。

今は核家族化が進んでいますから、家族全員が同じ家に住んでいない場合も多いでしょう。そうであれば、家族で旅行するときには、おじいちゃんも、おばあちゃんも、お孫さんも一緒に気兼ねなく過ごせる空間が欲しい。民家を一棟まるごと使えば、自分の家のようにリビングや畳の座敷に家族みんなで集まって食事をしたり、会話を楽しんでいただけます。だから一棟貸しにしたいなと思ったわけです。

町家再生から見えた暮らしの文化

そういうニーズなり、使い方を想定しながら古い家に手を入れるというのが、私たちの基本的な考え方です。格好よくするのではなく、できる限り日本の家が持っている美しさを残しながら、現代の生活スタイルに馴染んでいる方々、海外から日本に来てくださる方々にとって居心地のいい場所をつくりたい。

私たちが再生する町家はもともと伝統的な技術や手法に則って建てられていますが、途中で必ず何らかの手が入っています。建具がアルミサッシに替えられていたり、ベニヤ板と壁紙で室内を仕上げてある場合も少なくありません。これをできるだけ元に戻した上で、さらに100年以上持つように改修することを心がけています。

日本の家の美しさは、ミニマルな研ぎ澄まされた空間にあります。そこにわずかに手を加えて、さらに空気をよくする。茶室がそうですよね。花器に一輪野の花を生けると空間がビシッと締まって、季節を感じさせるとともに、お客様をもてなすのにふさわしいしつらえが整います。

日本中に美しい町が残っていますが、そういうところがいま過疎化・高齢化によって空き家だらけになっています。このような空き家を京都でやっているのと同じように再生して、滞在したり、食事をしたり、ものを買ってもらう場所にする。結果として賑わいが生まれ、雇用が生まれ、若い人たちが町に戻ってきて、「暮らしの文化」が継承できるのではないか。そういう仮説に基づき、10年前から活動しています。

「暮らしの文化」とは、衣食住すべてに関わる地域の営みそのものです。そういった暮らしの文化を味わう仕組みが、これからの観光には大事です。

profile

梶浦 秀樹（かじうら ひでき）

1956年東京都生まれ。庵代表取締役。東京大学法学部卒業、日本国有鉄道、小売全国チェーン代表取締役、西武しんきんキャピタル取締役などを経て、2003年に庵を設立。

地域の文化を見直して、美しい日本を次世代に引き継ぎたい

池坊 由紀さん

いけのぼう・ゆき

1965年、京都市生まれ。華道家元池坊次期家元。1988年学習院大学国文科卒業。次期家元として、全国各地の花展等への出瓶や講演、シンポジウムへの参加、海外でのいけばなの普及にも尽力している。

生け花

廊下の片隅にスツールを置き床の間代わりに花を飾る

「日本の文化だからと固く考えずに、それぞれの日々の暮らしの中で自由に花に関わったり、季節を取り入れる工夫をしていただきたいですね」

日本の住まいと生け花の関わりを考えたとき、まず思い浮かぶのは、和室の床の間と生け花の組み合わせではないでしょうか。床の間は開口部の位置によって光の差し込み方が異なりますが、そこに飾る花も光の方向に合わせて形を変えるのが習わしです。つまり、生け花は人間が見て美しいかだけではなく、自然と寄り添いながら形を生むのですね。

こういった習わしは、日本人がこれまで自然を意識してきたからこそ生まれた発想です。床の間や生け花の考え方からも分かる通り、日本人は室内にいても常に自然とともにある。あえて外と内を区切らず、家の中でも自然を感じられるような表現を取り入れてきたのだと思います。

和室や床の間がなくても、その考え方は、これからも変わらず住まいに引き継いでいきたい。家の中のどこかに自然の移り変わりを意識する、静的で、ある意味スピリチュアルな場を自分なりにつくるといいですね。そこが、季節や行事に応じて花や掛け軸が移り変わっていく、からっぽのように見えて充実した空間になります。

たとえば、今の住まいにある棚を活用したり、廊下の片隅にちょっとしたテーブルやスツールを置いたりするくらいでも十分なのです。その場をつくった瞬間から意味ある空間に生まれ変わるでしょう。

堀井みち子さん

ほりい・みちこ

公益社団法人全日本きものコンサルタント協会教授。長年に渡り、着装、着物のよさを伝えてきた。自身も１年中着物で過ごす着物好き。

着物

子どもの記憶に一生残る着物姿を

着物を着ると自然に歩幅が狭くなり、少し内また気味に歩くことになるが、これは着崩れを防ぐ自然な知恵でもある

着装（着付）を習い、着物が着られるようになった人の多くが「いつもと違う時間が流れているような気がする」とおっしゃいます。

着装はそんなに面倒なものではなく、また、身につけているときも生活のいろいろな動作に不自由があるわけではありません。それでも着物を装うだけで、ゆったりした気持ちになり、いつもは気づかなかった路傍の花に目が留まる。所作を気にするようになり、仕草が美しくなる。着物にはそんな力があります。

和室には1畳を何歩で歩くですとか、縁や敷居を踏まないなどの作法がありますが、着物であれば、いずれも自然にできること。茶道、華道、そのほか、和の文化は和室と着物があって生まれたものだと実感します。

と言っても、着物を文化として棚に上げ、偉いもの、遠いものにしてしまってはいけません。もっと日常的に楽しむものにしないと、文化は広がらず、続きません。

私の提案は、着物で子どもと一緒に雛祭りやお月見などといった季節の行事を楽しむこと。私も子どものころに目にした、母の節目節目の着物姿を特別な日の思い出として懐かしく覚えています。子どもの記憶に一生残るものとして着物姿があるとしたら、装う楽しみも増えるというものではないでしょうか。

重川 隆廣さん

おもかわ・たかひろ

1951年、新潟県生まれ。新潟大学大学院自然科学研究科博士課程修了。博士（工学）。一級建築士。日本建築学会北陸建築文化賞、新潟県経済振興賞など受賞。重川材木店代表取締役。

伝統建築

伝統的な日本の家は高い精神性を備えている

和の住まいは、一つ一つの家ばかりでなく、それらが連なることで街なみができてくる。そうした日本らしい家並みの風景が、子どもたちにも優しい心を育てていくのでは

これからは、木・土・紙・畳など伝統的な材料を用いながら現代風な暮らしができる家が求められるのではないでしょうか。これらの材料を上手に使って、和の雰囲気が感じられる、現在の暮らし方に合う住宅をつくることは十分可能です。

私は、築50数年の家に暮らしています。材木屋だった父がつくった家です。新潟県の山で切った木を適材適所で使っています。最近、特に感じるのは、その建物が力を与えてくれるというか、パワーを感じるということです。

日本の伝統的な木造住宅の作法も大切です。古くから決められてきた寸法に基づいてつくられた家は、プロポーションは完成されており、かなり精神性の高いものを持っているのだなと、歳を重ねて感じるようになりました。書道でも、中国の古典をしっかり修めて書いたのと、その書いたものを真似だけして書いたのとは違いますよね。

日本人のそうした高い精神性を継承するうえでも、和室は必要ではないでしょうか。一昔前は、畳の縁を踏まないとか、掃除をするときは雑巾をしっかり絞って、畳の目に沿って拭くといった住まいの作法がありました。これらのさりげない作法にも精神性が宿っています。昔からのこうした住文化を、親が子どもに教え、子どもが孫に教える。そんな暮らしが、今あらためて見直されてよいと思います。

伝統的な木割に基づいて設計・施工された広間。柱、鴨居、長押、廻縁など仕上材の寸法は、伝統的作法に則っており、現代的な要素を取り込みながらも、和風住宅の品格を感じさせる

無垢のフローリングのダイニングキッチン。窓に障子をあしらうだけで、洋室にも和の雰囲気をつくり出すことが可能だ

小堀 賢一さん

こぼり・けんいち

全日本宗教用具共同組合理事長。1988年設立の同組合は仏壇の公正な取引のルールづくり、消費者への情報提供などを行っている。

拝む

仏壇を前に 三世代一座、家族がつながる

住宅の広さと仏壇の有無、サイズには相関関係があるそうだが、最近はコンパクトで家具ともなじむような仏壇が多数販売されている

仏壇の発祥には2説があります。一説は天武天皇が685年、諸国の家ごとに仏舎を置き礼拝せよと命じたというもの。日本書紀に書かれており、実際に、飛鳥、白鳳、天平の時代につくられた仏壇も現存しています。

もう一説は江戸時代半ばに幕府が寺院に対して国民を管理するように、檀家制度を構築した際に始まったというもの。この2説の間には1000年もの開きがありますが、いずれにしても古いものというわけです。

ただ、実際の使われ方を見ていると、伝統を重んじ、宗教として礼拝するというよりも、ご先祖様を大切にするといった素朴な気持ちで手を合わせる方が多いようです。海外でもリビングにおじい様やおとう様の写真が飾ってある光景を見ますが、仏壇はそれに近い身近な存在と言えるのではないでしょうか。

仏壇のある家では法事などで家族、親族がよく集まりますが、これは家族の歴史や知恵、地域の風習や食文化などを伝え、家族の絆を深める場になります。親、子、孫、つまり三世代一座の場はなかなかありませんし、父から子では年代が近すぎて教えにくいことや反発されがちなことでも、祖父から孫となれば素直に伝わります。仏壇には、家族が集う場を提供し文化を伝承する力があるわけですね。

木

時を刻む住まい 和を大切にする住まい

木でつくられた住まいは、
日本人のDNAに
深く根ざしたものです。

安藤 直人さん

あんどう・なおと

1950年東京都生まれ。東京大学農学部林産学科卒、同大学院修士課程修了。農学博士。東京大学大学院特任教授、東京大学名誉教授。

工業化の20世紀が終わって、環境の時代が意識され、時を刻む材料がよいという評価に変わってくると思います。和の住まいには、木がある、土がある、草がある、紙がある。そうした時を刻める材料の集合体で、工夫されたものだと捉えることができるでしょう。

木を含めたこれらの自然の素材は、見た目や匂い、肌触りなど、おおいに五感を刺激するところがあります。人間は高感度なセンサーを持っているから、敏感に感じ取るのです。さらに言えば、日本人に脈々と続くDNAというような部分が、素直に受け入れる材料なのです。

木はそれほどすぐには傷みません。ただ色は変わります。それは、汚れるわけではなく「味がつく」のです。外壁に使うと当初は雨がかかってムラだらけになります。一様な色になるのに20年程はかかります。

「昔のもの、古いものはいいなあ」と感じるのは、ムラを通り越した後の姿を見ていいと思っているわけです。だから、変化を待つのです。

一様に変化するためには、手入れをしていく仕組みを整えたり、使う人にライフスタイルとして手入れやその重要性を教えないといけないかもしれません。住まい方の技術といってもよいかもしれない。

ただ、今の若い人たちは「スローライフ」と言い方を替えて、こうしたことを理解するようになってきている。これには希望が持てますね。

「人の和」を育む住まい

今の日本は、生活習慣の洋風化に伴って個人主義がはびこり、同じ一つ屋根の下に住んでいても家族はバラバラです。それぞれが個室にこもって関係を絶ち、テレビを見たりゲームで遊んだりしています。

一方、昔は障子や襖で部屋を仕切ることによって一定のプライバシーを確保していましたが、隣室の気配を感じることができました。昔の家では、家族が〝緩やかに繋がっている〟という安心感を自然に持つことができたのです。

また、しつらえについてもそうですね。今は床の間がなくなり、掛け軸を掛けたり、人を迎えるために花を生ける習慣がなくなりました。しつらえというのは、自分のためにやっているわけではなくて、相手を思う気持ちです。

「和の住まい」とは、家族はもちろんお客との関係性、つまり調和、仲良くする意味の「和」でもあります。これは、全体的なバランスがないと納まりません。家を一歩出ると、和は向こう三軒両隣、ご近所、そして集落、村へと広がっています。これこそ日本の生活だと思うのです。